

第4回 質問紙の作成

■質問紙の作成

必要、かつ、最小限の項目数にする。

回答者の負担、やる気の喪失、

成人でも、時間にして15分程度まで。項目数にして、100項目くらいまで。

依頼文は、あたらずとも遠からず。リサーチクエスチョンを前面に出さないこと。

親のしつけが子どもの成長に及ぼす効果 → 親子関係

集団の特徴を表す変数（フェイスシート項目）を入れておく（性別、年齢など）

どのような集団を対象とした研究になっているかを把握。

先行する質問の内容が、後から出てくる質問への回答に影響があってはならないとき、そのようにならないように配置する。

影響を及ぼしそうな項目は後ろに配置する。

抑うつ尺度など、ネガティブな動機づけが高まってしまうようなら、後ろへ。

潜在変数の測定は、複数の項目で手を変え品を変え聞く

その特性が高い人だったらこう答えるだろう、低い人だったらこう答えるだろうという区別がなるべくつくような項目を、複数提示する。

間接的な測定なので、どうしても誤差が大きくなる。たまたまその項目についてだけあてはまることがあるといけないので、複数の項目を使って、全体としての誤差を縮小する。

学力テストは普通、当該領域から網羅的に、複数の設問を構成して作成される。

→測定の信頼性・妥当性

値が大きい方が、その特性が高いような段階評定にするとわかりやすい

よくあてはまる 5 4 3 2 1 まったくあてはまらない

評定段階の数は4、5くらいが適当。7が限界と言われている。

既存の尺度の場合はあまりいじらない。

1つの質問紙内では統一したほうが回答しやすい。

小学校低学年や老人の場合には、2、3くらいにすることもある。

逆転項目の利用

他の項目とはデータ値と特性の関係を逆にした項目をいくつか入れておく。

全項目に111…とか、5555…のように、いい加減に回答されたデータの検出。

→ 検出後、合理的と思えば分析から除外。

逆転項目のデータ変換： 最大可能値 + 最小可能値 - データ値

必ず1度自分で回答してみる

必ず他の人に回答してもらい、不明な点、わかりにくいところなどを指摘してもらう。